

めざましをとめる前に目が覚めた。朝が弱い私にとって、こんなことは数えるほどしかない。イギリスへ出発の日、私は自分が思っている以上にわくわくしていた。

国際便に乗るのはこれが二回目だった。といっても、初めての海外旅行は私が五歳の時で、ほとんど記憶にない。出国手続きの手荷物検査では、危険物を持っているわけでもないのに、どきどきしながらセンサーをくぐった。機内に入ると、広い座席や一人一台の小型テレビがあり、約十二時間のフライトを、私は一睡もせずに映画や機内食を楽しんで過ごした。

そしてついに、私たちはイギリスの地に足を踏み入れた。髪の色や目の色、体格からすべてが違う人々がたくさんいる。そして、街の美しさに息をのんだ。家があって、お店があって、人が歩いてい、ただそれだけなのに、どこを切り取ってもまるで映画のワンシーンのようだった。ホテルへと向かうバスの中で、みんなのシャッターを切る音がとまらなかった。

ホテルに到着してひと息つくくと、明日はホストファミリーとの面会式だということを出して、急に不安になった。しばらく眠れなかったが、気づいたら朝になっていた。

私を受け入れてくれたホストファミリーは四人家族で、お父さんのジャーミー、お母さんのリサ、そして十八歳のソフィーと、私と同じ年で十五歳のハナの二人姉妹だ。そして、ルーシーという名前の六歳のメスの犬もいる。面会式にはジャーミーとリサが来ていた。優しいような人でほっとしたが、やはり不安でいっぱいだった。これから二週間、どんな日々が待っているのだろうと考えると楽しみだだったが、このときは不安な気持ちの方が勝っていた。

しおりのホームステイ一日目のメモ欄には、

「ホストファミリー同士の会話が聞き取れない。しかし、みんなと

でも親切にしてくれる。もっとたくさん話したい。」と書いてあった。私はこれを書いた時の気持ちをよく覚えている。伝えたいことはたくさんあるし、話してみたいことも次々と思いつく。かぶのに、言葉になつて口から出てこない。すぐくもどかしかった。もっとまじめに勉強しておくのだったと悔やんだ。しかし、今悔やんだところで過去は変えられないと気付いて、少しでもこの語学研修を良いものにできるように、まずは明日、何か一つ手伝いをしようとして決めてから寝た。

ホームステイ二日目、この日は午前が初めての授業だった。朝八時半にお手製のランチボックスをもらって登校した。ランチボックスは、日本の一般的なおかずとごはんの詰まったお弁当とは違い、サンドイッチ、チップス、チョコレート菓子、果物、といったものが主流で、飲み物はミネラルウォーターがはいっていた。たくさんあるスナック類をみんなで交換して食べるのが楽しかった。

学校の雰囲気は日本とだいぶ違った。先生の好きなアーティストの音楽が流れていたり、学生がメイクをしていたり、休み時間にお菓子を食べるのは普通だったり、日本の学校と比べると、自由なことが多いと感じた。しかし、決して乱れているわけではなく、のびのびとした雰囲気がとても好きだった。

次の日の午後は英国人学生とのディスカッションがあった。この日はたくさんのお友達と話すことが出来て、とても楽しかった。何よりも、相手と英語で話す楽しさが実感できた。私の英語が、言いたいことが、伝わっている！そう思ったことが自信につながって、話しかけることが怖くなくなった。しかし、思っていることを確実に言葉にして伝えるのは、思っていた以上に難しく、伝えられなかったこともあった。発音だって悪いはずだったし、一発で伝わらないこともあったが、それでも英語を話すことが楽しかった。

この日は次の日のランチボックスを作るのを手伝った。リサがありがとう、と言ってくれて、嬉しかった。

次の日からは毎日が本当にあつという間だった。一日一日の内容

が濃く、充実しすぎていて、噛みしめる暇もないほどだった。しかし、時間の流れ方はゆっくり感じた。東京のように人々が早歩きではなく、ゆっくりと歩く。目が合えば知らない人同士でも微笑み合っていてあいさつを交わす。あの余裕さはどこからきているのだろうか。店員も日本とは違う雰囲気をもっていた。日本は迅速で質の良い接客を目指すが、イギリスではどちらかというとフレンドリーに接してくる。カフェで紅茶を頼んだとき、なかなか紅茶がでてこない事があった。しかし、人手が足りてないというよりは、ただマイペー
スにゆっくりと作業しているのである。やっぱり日本の店員は接客がいいな、と思ったが、逆に日本がおかしいのかもしれないな、とも思った。

しかし、どこに行っても思うのは、素敵な街だな、ということだった。建物は古く趣があって、家々は同じ色に統一されていた。それぞれの家にはこだわりがあって、装飾に気を使っており、とてもかわいらしかった。どこを撮ってもきれいな写真が撮れるので、容量が減ってしまったが大変だった。きっと、冬のイギリスは夏とはまた違った美しい景色が見られるに違いないので、いつか絶対に見に行きたいと思う。

ハナとはだんだんと打ち解けて、一緒にバドミントンをしたり、寝る前に話したりした時間がとても楽しかった。日本語を教えてみたり、写真を撮りあったりして笑いを共有できたときに本当に楽しかったし嬉しかった。私のつたない英語も一生懸命聞こうとしてくれて、同じ年とは思えないほど優しく思いやってくれるが、お父さんやソフィーとふざけあっているのを見ると、同じ十五歳の女の子なのだなあ、と感じた。

ハナとの一番印象に残っている思い出は、日本に帰る前日の夜のことである。その日はホストファミリーと過ごす最後の日で、私たちは夕食のあとに、手紙とイギリスのお店で買っておいたプレゼントを渡した。みんなその場で手紙を読んでくれて、とても喜んでくれた。渡す前は泣いてしまおうかな、と想像したりもしたが、明日日本

に帰るといふ実感がなくて、まだまだ一緒に過ごせるような気がして、涙は出なかった。それどころか、その後もハナの大好きなゲームをしたりして、楽しんだ。

しかし、寝る前にハナの部屋に行って少し話をしていたら、やっぱり涙はこぼれてきた。ハナも私のペアも泣いていた。涙が止まらなくなると鼻水もずるずるになった私を見て、

「クリスマスに会おうよ」

と、ハナがティッシュの箱を渡しながら言ってくれた。場所も日にちも決めていない約束だけれど、なぜだか会える気がしている。

私はこの家族と過ごした日々を絶対に忘れない。休日買い物したり、一緒に出かけたりしたことは、どれも楽しい思い出が、思い出すのはそれよりも、ファミリーとの何気ない会話だった。夕食後にみんなでゲームをして盛り上がりたり、ソフィーが宿題を手伝ってくれたり、ハナがポップコーンをひっくり返してしまってみんなで大笑いしたり……。書き出していけばきりがない。しかし、私にとっては、何気ないこともすべてが大切な思い出になった。このファミリーと出会うことが出来て、本当に幸せだと思った。

イギリスはたくさん素敵な人との出会いと、大切な思い出を私にくれた。そして、私の中の世界を広げてくれた。私は、自分のやりたいことと目標を見つけることが出来た。

そんなイギリスに、ホストファミリーに、そしてこの機会を与えてくれた両親に感謝の気持ち忘れずに、いつか目標を達成できたときに、恩返しをしたい。